

# 町民文芸



## 只見短歌会

七月詠草

大塚栄一 指導

小倉キミ子

草刈りのすみたる畦に一本の細きあざみは爽やかに立つ

古川 英子

漸くに人工透析に慣れし夫か帰りし声に力こもれり

馬場 八智

目まぐるしく変る政策に関心の薄れて今日も畑の草取る

関谷登美子

中学の思ひ出深き恩師逝き墓に詣でむと友と連立つ

渡部ゆき子

新緑の山辺彩る栗の花しるき匂ひは風に乗り来る

五十嵐夏美

月例の詠草の端に連絡やみつをなどの詩を書き添へくるる

目黒 富子

孫ら遊ぶ姿を視野に入れてわが急ぎ夕餉の茎立ちを摘む

渡部ヨリ子

毎日の暑さ続けば花も野菜も萎れきて雨の降りくるを待つ

新国 洋子

リハビリと言ひ一輪車押してゆく退院の夫の足のふらつく

( 出 詠 順 )

## 只見俳句会

八月例会

目黒十一 指導

笑 羊

朝飯前露にまみれて野良におり  
日のかげり青虫枝に息を吐く

康 女

測量士赤き杭打つ青田風  
あじさいの青一入の雨上り

リウコ

幼らに残したきこと雲の峰  
草刈や野に在る菖蒲大株に

都

声上げて亡き兄を呼ぶ青田風  
茄子苗を植うる夕日に照らされて

一 穂

板の間の足裏に付く梅雨の夕  
一斉にエンジン音や夏草刈

敦 子

被災せし家も新に盆用意  
風欲しき風船葛軒下に

礼

流水式発電機成る日の盛  
一いつ時の朝の畑や涼新た

修 一

初茄子を二つ供えて父偲ぶ  
村中に慣れぬ声聞き盆支度

一 灯

かなかなや三日の生命懸命に  
生き残る蟻も瓦礫の中探す

又壺歩

くり返し日付取り出す夕端居  
昼寝覚め出されし水の旨きこと

邦 男

開設の老人ホームや草茂る  
送電の鉄塔補修や雲の峰

恒 夫

暮農ひるのり継ぐ話に加わりぬ  
亡き人に問うことばかり盆用意

吉 児

宵闇をほのかに揺する盆灯笼  
地に座して媪一人居門火焚く

隆 堂

濁流に日の照り返し栗の花  
鎮もれる神社や咲ける合歡の花

邦 夫

秋めくを近ごろ気づく蔵の影  
ハイヒール音こつこつと白日傘

